勧めのことば

―新総長就任に際して―

湯浅　八郎

幻無ければ民亡ぶ。

校祖新島先生の国つくり、人つくりの幻は凝って同志社となりました。思えば先生も同志社もともに神の御摂理によって、祖国日本の歴史の中に位置づけられ、意義づけられたものであります。

同志社はこのたび住谷悦治博士を第十四代総長にお迎えする運びとなりましたが、これもまた御摂理によるものと信じ、感謝と讃美とを神に捧げたいと存じます。

申すまでもなく総長は、一方綜合学園同志社の象徴として、天の聖旨にしたがい、常に人の和につとめ、飽くまでも立学の精神に忠なると同時に、他方山積する教学と経営との諸問題を現実的に、建設的に解決しなければなりません。もとよりこのような至難の大事業は、召命観にもとづく献身と聖別せられた勇気なくしては一日もつとまるものではありません。

私は今、新島先生長逝の後、同志社の責任を挺身分担した金森、小崎、徳富三氏に寄せられた勝海舟翁の書簡を想起いたします。これによれば、

「今日行掛之大業跡々を踏締候は不可言

六ヵ敷ものに候間　諸君御深慮有之　百難重り到候事と御覚悟専一と存候　小拙是迄難危之衝に当り　唯々一誠字　不撓之心得に而　内外我が負担するもの悉く矛盾と心得居　漸廿余年を経過し猶一日の思を成申候次第　後善の策も甚六ヵ敷　案外の事も生候もの」とあります。

日本的教養に徹し、時代の試練を超克した達人の至言とは正にこれであろうかと思います。

もとより御摂理の中にある同志社総長の心のよりどころは、「わたしは道であり、真理であり、命である」と訓えられたキリストでなければなりませんが、ポーロは常に「目をさましていなさい、信仰に立ちなさい、男らしく強くあってほしい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい」と勧めています。そして「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし、成長させて下さるのは、神である。だから、植る者も水をそそぐものも、ともに取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである。」と一切の栄光を神に帰すべきことをさとしています。

この宇宙時代に大同志社の責任をとるよう御摂理によって選ばれた住谷総長は、どうか予言者ミカが勧めたように、「ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神とともに歩む」人となって下さい。

断乎として是を是とし、否を否とする良心の自由を操守し、真摯に永遠の真理を探求する学問の自由を堅持し、謙虚にしかも果敢に同志社精神に徹して下さい。

祈禱

宇宙を創造し歴史を主宰し給う大御神。真理と愛と生命との根源である天の父なる御神。

はかりがたき御摂理の中に今日迄同志社を導き支え守り給い、今またよき総長をそなえ給いし御恩寵を、われら同志社人一同衷心より感謝し奉つる。

ねがわくは、住谷総長を祝福し、健康とえい知と勇気とをさづけ、神と人とに奉仕する同志社の使命を達成することを得せしめ給え。キリストの御名により感謝し祈願し奉つる。アーメン。

（評議員会議長・国際キリスト教大学名誉総長）

五つの憲章

――総長就任に際して――

住谷悦治

人生行路において、われわれは思いがけないことにいくたびか遭遇するものである。それは invisible hand によって導かれるものであり、「知られざる行径である」ともいう。アダム・スミスは、産業社会における経済現象を説明するさいに、この invisible hand という言葉を使っている。一教師として同志社学園に終始しようと考えていたわたくしが、同志社総長を受け継ぐなどということは、まさに思いがけない出来ごとである。明治八年新島襄先生によって創立された光栄ある歴史の八十八星霜。その歴史の跡を辿るとき、わたくしはその責任の重大さに、心身の押しひしがれる思いがする。わたくしは歴史における人間の力の限界と、それゆえにこそ、その意義を自覚するものであるから、総長に就任したからといって、いまさら声を大にして、これみよがしに抱負を述べる僭越（せんえつ）を敢えてしようとするものではない。しかって、この「感想」はいわば長年同志社大学の教職にある一同志社人としての、常識にすぎないのである。わたくしはそれをば、自分自身に向って言いきかせているひそやかな学園憲章であるとして抱きかかえてきたので、それは五つに要約される。

第一、わたくしたち同志社人はよい同志社をつくりましょう。

よい同志社とはいったい何か。単的には、新島先生の遺言の中に見出されるところのキリスト教精神に尽きる。「同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴い相待

て行ふ可き事」。「同志社教育の目的はその神学・政治・文学・科学等に従事するに係らず皆精神的活力あり真誠の自由を愛し以て邦家に尽すべき人物を養成するを務む可き事」これである。この同志社立学の精神がまともに実現されるならば、それがよい同志社である。新島先生が別のところで、「天下の人物を養成すべきこと」といい、「人を植える」といい、「良心の全身に充満する大丈夫」という。それは、民族・国家・社会、そしてひろく人類文化に貢献する人物の養成が考えられるであろう。これを学園同志社においみるならば、よい同志社には、共同社会の基本的条件が、キリスト教精神によって貫かれることにある。(イ)その目的における共働者の同一性、(ロ)その目的にたいして共働者の同一の個人的関心、(ハ)目的にたいするその自発性、(ニ)その成員における権利の平等。共同社会の基本条件がキリスト教を精神的基盤とするとき学園同志社の特殊性が普遍原理の上にその姿を現わしうるであろう。そのような意味の同志社をよい同志社と考えている。個人主義的な差別的なひとりよがりの同志社であってはならない。

第二、わたくしたちは人間性を尊重し、学園に真の自由と平等とを実現しましょう。

いま基本的人権ということがうたわれている。新島先生の遺言に「真誠の自由を愛し」ということがあるが、真の自由は必ず責任を伴うものである。そうした責任を伴う真誠の自由と、人間性の尊重による平等とは、基本的人権に生命を与える。若王寺山頂、新島先生の墓前に向い会って、墓一基が見出される。「松本五平の墓―校友有志建之」と書いてあるが、先生御在世のころ、当時の小使松本五平氏を、学生たちが「五平、五平」と呼び捨てにして使った。五平氏は学生たちに向って、新島先生は俺を「五平さん」と呼んでいるぞと言って抗議したという話が伝えられている。新島先生の平民主義、人間尊重の態度、いまの基本的人権の思想は、この「五平さん」主義に徹していた事実によって明らかであろう。先生の遺言に同志社の「社員たるものは生徒を鄭重に扱う可き事」という箇条があるが、それは、まさに、人間尊重の基本的精神を指向したものである。また遺言の中に、「同志社は隆んになるに従ひ、機械的に流れるの恐れあり、切に戒慎す可き事」という一箇条があるが、大同志社の機構が、事務的にも機械化することは、一般的に止むえぬ事情もあるが、それを救う道は、人に対するに「親切と温情」をもってすることである。人間性の尊重である。親切と温情とは、機械化と矛盾するものではならないと思う。先生の戒めは、われわれの反省するところであらねばなるまい。学園の民主化ということが、よく言われることであるが、それは、こういうことに関連するのではあるまいか。

第三、わたくしたちは、国際友好主義と平和主義に立ちましょう。

わが同志社には、大切に守らねばならぬいくたの伝統があるが、この国際的友好の立場は創立以来の著るしい特質である。国際友好の精神が衰えるならば、もはや同志社の特質は色褪せた（しなび）萎た花である。われわれはつねに広い国際的視野に立ち、国際友好を身につけた日本人であることを心懸ける必要があろう。国際主義の立場は、必ず平和主義と一体である。恰もメダルの表

と裏のごとく、車の両輪のごとく、唇と歯のごとく、その一側面を欠くことは許されない。同志社人の特質として、国際友好主義と平和主義をとくに強調したい。

第四、わたくしたちは、学園内を美くしく清潔に保ちましょう。

学園内のあらゆる建築物、教室、廊下、器具、用度いっさい、庭園の樹木、柵、いっさいのものは、長年にわたる同志社人の尊い歴史的遺産である。かりそめにも損傷したり、粗末にとり扱ったりすべきでない。構内のすべてを美しく清潔に保ちたい。汚れた構内、教室などで、清澄な気持で学問にいそしむことができる筈はない。楽しい学園生活がエンジョイできる筈はない。学園を美しく清潔に保つことは、同志社人としてのまた文化人としての、高いエティケットの問題であり、また教養のバロメーターである。

第五、わたくしたちは、よく学び、また明朗に楽しく健康な学園生活を築きましょう。

よく学ぶことは、学校に属するものの当然の義務である。学校とは、教育組織の体系であり、教えるとともに教えられる教育の、砌磋琢磨のきびしい場である。よく学ばない教師は教師としての資格を失う。よく学ばない事務職員は事務職員としての資格を失う。よく学ばない学生は学生としての資格を失う。それはいまさら多言を要しないところのことであるが、よく学ぶことは、なかなか困難な棘の道である。しかし学校であるかぎり、その棘の道を避けて通りぬけることは許されないであろう。学校に属する人びとの宿命ともいうべきものである。よく学ぶことは、アカデミズムの建設であり、復興である。同志社アカデミズムの建設と高揚は、われわれの現代に負わされた歴史的な使命であるといわねばなるまい。

学校の半面は、すなわち学校のベター・ハーフは、学園である。学園とは、学校に参加するすべての人びとの生活体の体系である。学校には必ず参加者の生活体としての学園生活がなければならない。学校と学園とは、二にして一、一にして二である。不可分の一体として、生成発展して行かなければならぬ社会である。われわれは、この学園生活を、明朗にして楽しく、しかも健康なものとしてエンジョイしたい。それがためには、すでに掲げた共同社会の基本的条件を実現することであり、同一目的にたいする自発的な協力に依らねばならないであろう。

われわれ同志社人は、それぞれの invisible hand によって導かれ、この世において、同一の学園にそれぞれの人間形成を完了すべく運命づけられてきたようなものである。同志社学園を通してのみ、生き抜いて行かねばならない自分たちの生涯である。そのかぎりにおいて宿命でさえある。希くばわれわれは、よき学校とそれを包含するよき学園を築きあげたいものである。同時にそれがわれわれの、この世に与えられた、ただ一つの人生であるという切実の自覚のもとに。

このことは、わたくしのひそかに考えていた「あらまほしき、よき同志社」への一つのビジョンであるにすぎないものであり、

とくに同志社のように立学の精神の明確な学園でとりたてて叫び出すほどのものではあるまい。いわば同志社人の常識である。わたくしはその常識をさらに深化し押しすすめてゆきたい。たびたび人びとのまえで語ったことであるが、同志社構内には同志社の歴史を見守ったらしい大きな樹木が五六本逞ましく育っている。明治時代の赤レンガの建物、新しい洋式の校舎にはさまれて、美しい均衡を保った姿で繁っているが、そのガッチリと居据った安定した大樹の、空を蔽うように繁った枝や葉の、四季それぞれの移り変りに示す姿は頗る魅力的である。植物学者に聞くと、地上に繁っている枝・葉のひろがりと同じひろがりに、地下に根がはりめぐされているという。その見えるところ、見えざるところの、樹木いっさいの緊密な有機的な関連こそがあの樹木の安定感と均衡感とを与えているのだと思う。海岸の激しい潮風にいためつけられている松の倒れんばかりに傾いた姿を眺めるとき、やはり、その根が、ガッチリと反対の方向に強く支えにしていることが肯かれよう。

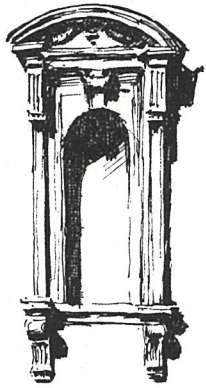
人間の社会も、またその一部であるところの学園共同体の安定も均衡も、発展も、それと同じようなものではあるまいか。共同体の基本的条件とされているところの自発的な協力というのは、そういったものであろう。同じ時代に、同じ国際的・国内的事情のもとに生き、同じ社会、同じ学園にその生を享けておるわれわれは、よしんば、社会層の相違、特殊な環境に成長し、思想、感情、教養等々にいろいろの特殊性があるに相違ないとしても、現実の生活体において、必ず、語り合い意思を疎通し合う共通の広場があると思う。その共通の広場が、広いか狭いか、そのニュアンスを考慮しても、その広場を探し求めることが自発的な協力であり、共同体の基本的諸条件が人間社会に帰納された真実の意味であろうと思う。人びとのいうところのゲマインシャフト Gemeinschaft（共同体）とゲジェルシャフト Gesellschaft（社会体）とを内に包んで、その上に乗り越えてゆくところの高度共同社会・ゲノッセンシャフト Genossenschaft というような人間の社会のあり方が考えられるわけである。たとえ、その実現は近い将来に、直ちに期待することはできがたいとしても、それへの、絶えまない誠実のつとめを怠らないところに、いきとし生ける人間としての努力の、歴史的意義があるのではないか。聖書に、一粒の麦、地に落ちて死ななければ、ただ一つであろうけれど、もし死ぬならば豊かに実を結ぶであろうという言葉がある。歴史的には死して生くるの道であり、まさに人間のほんとうの歴史的使命を指向したものであろう。

二宮尊徳の歌に、この秋は雨か嵐か知らねども、今日のつとめの草を採るかな、というのがある。雨降らば降れ、風吹かば吹け。春蒔（ま）いた種は秋にはみのる必然の道ゆきがある。いまわたくしたちは、幸いに同志社創立の精神、立学の目的の明瞭なものを持っている。開花すべきその不変の目的に向って、それをば現在受けついだ全同志社人の現実的・歴史的なつとめは、誠実に、豊かなみのりを夢みつつ、よき同志社と同志社人とをつくるとともに、みづからもよき同志社人になるよう努力することである。

（同志社総長）

勤め終えた校僕

大塚節治



私は去る十一月十日任期満了により同志社総長の職を退き悠々自適の生活に入りました。在任中諸方面から寄せられた御支援に対しては唯々感謝のほかありません。昭和二十五年、湯浅総長外遊のため五月頃からその代行を命ぜられ、八月に入り同氏の辞任により、推されてその後継者になりました。教授から推された者としては最初でもあり、何ができるか全く未知数でありました。そこで、前任者の残任、留任期一年という条件づきで選挙されたものでありました。そんなわけで一般の信頼も少なく試験的な就任であり、自分でもどうせ長くはもてないだろうと思い、校僕のつもりで就任した次第でありました。それがはからずも十三年もつづいたのだから世の中は不思議なものであるとわれながら感嘆し、一種の畏れを抱いていたのであります。人心の倦怠を懸念し今度こそは引退したいと思っておりました。

秋晴れや思わず長居したりけり

は私の偽らぬ心境でありました。また「主よ今こそあなたは言葉どうりにこの僕を安らかに去らせてくださいますように」(Nunc dimittis Servum tuum Domine, Secundum verbum tuum in pace. ルカ二の二九)とは私の真実の願いでありました。多少の波瀾はありましたが素願叶うて安らかに引かせて貰い自由の身となりましたことは仕合わせであります。と申すとお前は自分のことばかり考えているとお叱りを蒙るかも分りませんがそこらは御判断におまかせします。

已にある会合でも申したことでありますが私の第一の念願は学園の平和を保つということでありました。これは私が学生時代から五十年ないし六十年にわたり感じていたことでありました。騒動は同志社名物の一つで、その度毎に出血が多くあるいは互いに傷つき、あるいは良教授を失い、あるいは募金の好機を失し、学園の成長発展は度々頓座したので

あります。私はこれを見てきたものですから自ら斯様な念願がわいたわけであります。

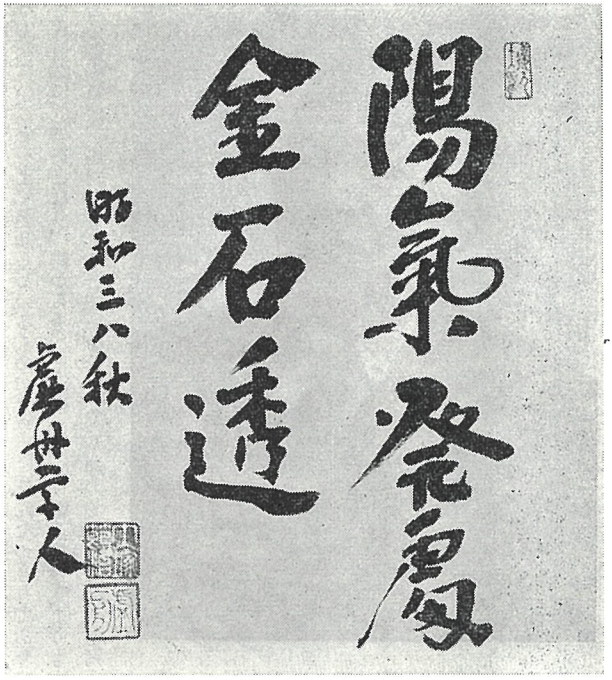
ところで平和を維持するためには事に当たって一刀両断の処置をなし、力によって治めることが勇ましく喝采を博するわけですがこの方法は怨嗟を招き不平を醸成するもととなるのみならず、自分にも自分の周囲にもそんな力がないことをよく承知しているものですから自然に低姿勢となり、側からもっと高姿勢をとらねば、馬鹿にされると注意を受けたこともありますが、どうも校僕の心はぬけませんでした。そんなわけで兎角穏便な妥協となったり、あるいは廻り道をしたり、敗けて勝つといった負け惜みのような結果に終ることもあったと思います。それが学園の方向を誤らせたとすればその罪は大ですがその功罪は歴史の審判にまかすことといたします。

そんなつもりでありましたから信賞必罰という厳正な態度よりも大らかな自由な態度が却って有効であると考えたのであります。見ぬ振り、きかぬ振り、知らぬ振り、馬鹿な振りする四振主義も心の底にはありました。併し聖書のほか、私にとってもっとも強き指針となったものは横井小楠の詩であります。

神知霊覚湧如泉
不用作為付自然
前世当世更後世
貫通三世対皇天

私はこの詩の趣旨を「小刀細工をすな、功罪は歴史と神の審判にまかせよ」という風に解釈しているのであります。実際、学内においてすら自ら手を下さずとも、金は金の如く瓦礫は瓦礫の如く、時と歴史の審判を受けているのであります。

ここで私は一言無処罰主義にふれたいと思います。これはわれらの先輩、横浜高工初代校長鈴木達治先生の三無主義すなわち、無試験、無採点、無処罰の内から無処罰だけがとり上げられ、これと新島島先生の自責の鞭とが結ばれているように見受けます。新島先生が個儻不羈の学生をなるべく制肘せずその個性を伸ばさせようとされた点、また先生が学生への罰を自分でとられた点などには一見無処罰的精神の現れの如くに見えますが、実際は先生は屢々厳罰を施し学則違犯者を退学せしめられたので、文字通りの無処罰主義者ではなく、寧ろ学則の励行主義者であったように思います。特に自責の鞭は学則尊重の精神の現われであって、無処罰主義とは正反対であります。私が信賞必罰よりも寛容に傾いたのは、決して無処罰主義を採ったものではありません。教育の精神、時代の変化、自己の能力等を考慮してのことであります。要する



に無所罰主義は少くとも今日の大量教育では不可能なことではないでしょうか。

いま一つ私は自分にとって大事なことを古典から学んだのであります。それは漢の高祖が天下を平定して洛陽の南宮に酒宴を開いたときの話であります。周知の通り、高祖は席上列座の諸侯や諸将軍に向って一つの質問を発しました。それは自分が天下を取った理由相手の項羽が天下を失った理由は何かということでありました。高起、王陵という二人の家来が答えました。「陛下は人をして城を攻め地を掠めしむれば因ってこれを与え天下とその利を同じうす。項羽は然らず功有るもは之を害し、賢者は之を疑い、戦勝って人に功を与えず、地を得て人に利を与えず」と。ところが高祖は「公はその一つを知ってまだその二を知らず、それ籌を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決するは吾子房に如かず。国家を鎮め、百姓を撫し餽餉を給し、糧道絶たざるは吾蕭何に如ず。百万の衆を連ね、戦えば必ず勝ち、攻むれば必ず取るは吾韓信に如かず。此三人の者は人傑なり。吾能く之を用ゆ。此れ吾が天下を取りし所以なり。項羽は一つの范増ありと雖も、而も用ゆる能わず。此れ其我が禽と為れる所以なり」といい群臣悦服すとあります。（十八史略）私はこの文が名文であり、事件が劇的で非常に面白くかつ校僕の心得として誠に大切なことがのべてあると思い、時々手訳本を出しては読みかつ楽しむのであります。自分には何一つこれという能力はありませんが周囲の人々のもつ能力を邪魔をせず、十分に伸ばして貰うことをつとめたのであります。十三年間の思い出をかけばきりがありませんが、一つに学園の平和、二に作為を用いずして自然に対す、三に人様によく働いて頂く。この三つが校僕として私の心得でありました、いま長き勤めを終えた私は「主よ僕を御言葉に従い安らかに去らしめ給う」と賛歌をとなえたいのであります。最後に困窮して、めいりそうになったとき常に私の気宇を大きくしてくれた陽明の貶海の賦をつけ加えて紙白をうずめることといたします。

険夷原不滞胸中、何異浮雲過大空夜静海濤三万里、月明飛錫下天風。

（前総長）